

本論文は

世界経済評論 2024年9/10月号

(2024年9月発行)

掲載の記事です



世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料
1,320円×6冊=7,920円 ▶ **6,600円** 税込 **17% 送料無料 OFF**



富士山マガジンサービス限定特典 ※通巻682号以降
定期購読期間中 デジタル版バックナンバー **読み放題!!**



世界経済評論 定期購読

[24時間・年中無休]
☎0120-223-223

お支払い方法 Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。 Fujisan.co.jp
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。 雑誌のオンライン販売

寺田寅彦の「とんびと油揚げ」

北九州は八幡の姪がこう書き寄越してきた。

「昨日、庭で落葉樹に寒肥をやっていたら、ピーヨロ ピーヨロと鳴く大きな声が聞こえたので見上げると、とんびが一羽、空を舞っていました。大平台で見かけるのは とても珍しいです。30分くらい見てたけど、ほとんど羽ばたかず、風に乗って舞っていました。羨ましい…」

これを読んで、寺田寅彦の「とんびと油揚げ」をまた思い出した。また、というのは、この随想は1950年代の終わりの高校の教科書にでていたはずで、この他は記憶に蘇るものは一つもないのに、これだけは時折ふっと思い出すからだ。なぜだろう。

視力が嗅覚か

思うに、普通に見かける鳥が空から地面の鼠の死骸にさーっと舞い降りて掴み、舞い飛び去る。どうしてこんなことができるのか、という、ふつう疑問を持つべきところ考えない、そんなことを寅彦が取り上げたからか。それとも、普通は考えない鳥の鼻などを持ち出したからか。鳶の目は人間の目に比べて小さすぎる、そんな目では遙かな地面に横たわるものが見えるはずがない。とすれば、地面の死体が発する臭いに依るほかないと結んだからか。

幸い、この短い随筆はインターネット図書館青空文庫に入っている。寅彦はいう。

「かりにねずみの身長を十五センチメートルとし、それを百五十メートルの距離から見るととんぴの目の焦点距離を、少し大きく見積もって五ミリメートルとすると、網膜に映じたねずみの映像の長さは五マイクロンとなる。それが死んだねずみであるか石塊であるかを弁別する事には少なくともその長さの十分一すなわち〇・五マイクロン程度の尺度で測られるような形態の異同を判断することが

必要であると思われる。しかるに〇・五マイクロンはもはや黄色光波の波長と同程度で、網膜の細胞構造の微細度いかに問わずともはなはだ困難であることが推定される」

ここで、人間の目と鳶の目の比較ははくの記憶間違いだったことになる。

理学博士号を持つ寅彦

ついで、寅彦は、「視覚によらないとすると嗅^{きゆう}覚が問題になるが、従来の研究では鳥の嗅覚ははなはだ鈍いものとされている」として、ダーウィンが「数羽の秃鷹^{はげたか}コンドル」を使った実験、「他の学者」による「ある種の鸚^{みぎこ}」の実験などをあけて、鳥の嗅覚は鈍いと結論するのは「はなはだ非科学的であろうと思われる」とする。

そこで、水槽の底を熱する時に生じる「熱対流」を考え、同様の現象が腐った肉の臭いが「^{ほう}窩状あるいはむしろ腸詰め状対流渦」を大気に形成して気流にのるのではないかと、「インドの^{ヴェルチアブ}秃鷹」について研究した人の結果」から推理する。

高校の教科書には「腸詰め状対流渦」の図が出ていたと思う。寅彦は「とんぴの場合にもおそらく同じようなことが言われはしないかと思う」とし、「もしどうしてもこの仮定が許されないとすると、すべてが神秘の霧に包まれてしまうような気がする」とこの随想を結ぶ。

寺田寅彦は1908年理学博士号を得た人だが、これは「昭和九年九月、工業大学蔵前新聞」に出たとある。翌年亡くなった。

猛禽と視力

姪が鳶の鳴き声を報じてきたのは、見ると、2月27日だったから年の初めに遡るが、その後ま



佐藤 紘彰

た寅彦の随想を思い出した。隔週評論誌 The New York Review of Books (June 6, 2024) に「可視と不可視の世界 (Visible and Invisible Worlds)」と題する評論が出ており、「人間は予想されるように、ものを感じるとする点では優れている。霊長類は優れた視力を持つが、猛禽だけがそれより鋭い視力を持つ」とあったからだ。これは動物の感覚を様々な角度から扱う書物3冊を取り上げたものだが、この際いくつかの報告を併せて見て寅彦の推論がかなり外れていたことを知った。

評論を書いたのはシドニー大学の歴史と科学歴史教授 Peter Godfrey-Smith。教授は、猛禽の視力に続けて、「西欧の哲学者は多く臭覚を蔑み、プラトーンは『臭いの種類は多くは全く名を持たない』と言い、カントは臭覚が全く不要なばかりか、『それを磨きあるいは洗練化しても役立つため』と述べた」と指摘する。

カントなどは、もちろん日本の匂い分ける能力を争った伝統などは知らなかったに違いないが、寅彦に戻ると、ダーウィンが実験したという「禿鷹はげコンドル」の書き方は曖昧で、近年の調査によると、いくつもの種類の禿鷹 vultures は大半嗅覚に依るが、視覚に依るものもいくたりかいる。こう報ずるのはコーネル大学の Cornell Lab のオンライン報告 All About Birds である。

ただ、禿鷹でもアメリカではごく普通の turkey vultures が「食べ物を探す高さで腐ったものを嗅ぐというのにはありえない」と『The Birder's Handbook』(Simon & Schuster, 1988) は言う。この類の本は無数にあるが、これは著名な生物学者 Paul Erhlich と他二名による。

これに対して「コンドルは食べ物を見つけるのに嗅覚を使う禿鷹と違い、視覚を使う」と、カリフォルニア州政府の国立公園は報じる。このコンドルは熱上昇気流に乗って毎日数百マイル飛翔するが、見つけて食べるのは大鹿 (elk) や鹿、羊、

牛の死骸。California condor は1980年代に絶滅寸前から救われて少しずつ増えている。

巨大な翼幅を持つコンドルに比べると小さいが、それでも大きな鳶 (black-kite, black-eared kite, *Milvus migrans*) は、特に死骸を狙うわけではなく、生きた小鳥や蝙蝠、昆虫、蛇、魚のほか、鼠など齧歯動物を食べる。使うのは視覚と聴覚、と述べるのは The Iran Times の記事 Black Kite, the most abundant raptor (December 19, 2016) である。

寅彦は、また鵟みさこをあげる。ある学者の実験によれば、この鳥は提供した「鮮魚を食い尽くしたが布切れの下の腐肉には気づかなかったとある」。それはそうだろう。この猛禽は食べるものの99%が魚というが、魚が水中を泳いでいるときの屈折を空中から調整しながらまっすぐに飛び込み掴む。ある国の伝統では、この猛禽は「視力の象徴」とみなす、と osprey の記述にある。ほくはサウス・カロライナおよびノース・カロライナの海辺で夏休みをほぼ30年過ごしたが、その様子を間近にみたことが二度ほどある。

小鳥の餌

鳥の視力といえ、今は亡き友人 Lenore Parker さんが夫君 Jim と持っていた山荘を思い出す。マンハッタンの北、Mt. Hawk の山頂近くの放棄されたリンゴ園にあって、よく招いてくれたが、ある時ほくが瓶状の小鳥の餌入れをベランダに吊ると、黒と黄色の際立った goldfinches が、かなり離れた木立からたくさん飛び集まったのに驚いた。鳥でも水鳥の多くはかなり臭覚が発達しているというが、小鳥の餌に使われる向日葵の種、アザミの種、キビなどを遠くから目でどう確認するのだろうか。

さとう ひろあき 翻訳家、コラムニスト在NY